

花き流通標準化検討会（第1回）概要

1. 日時：
令和4年7月27日(水)15:30～17:10
2. 場所：
農林水産省 第3特別会議室（一部、オンライン参加）
3. 出席者：

＜卸売業者＞

福永 哲也	豊明花き（株）	代表取締役社長
田嶋 久嗣	札幌花き園芸（株）	代表取締役社長
中嶋 強	（株）仙花	代表取締役社長
林 悦孝	（株）名港フラワブリッジ	代表取締役社長
大西 常裕	（株）なにわ花いちば	代表取締役副社長

＜行政＞

武田 祐紀	農林水産省 大臣官房新事業・食品産業部食品流通課長
丹菊 直子	農林水産省 大臣官房新事業・食品産業部食品流通課 卸売市場室長
小宮 英稔	農林水産省 農産局園芸作物課花き産業・施設園芸振興室長

＜オブザーバー＞

（株）大田花き花の生活研究所
一般社団法人日本花き卸売市場協会

4. 議事概要：

新事業・食品産業部食品流通課から「花き流通標準化について（資料3）」について説明後、花きの流通標準化に向けた今後の取組について意見交換

【各構成員からの主な意見】

○以下、構成員からの主な発言。

1. 標準化を実行するための進め方について

- JAは短期の担当変更もあって物流に対しても現状維持の姿勢が強い。物流の合理化を進めるには卸売業者だけでなく、JAも意識を変えることが必要であり、産地にも参加してもらう必要。
- 今ある箱などから変えると、例えばパレタイザーの座標の変更など細かな変更を伴うことから、農協などの産地が導入に至らない状況。産地とともに導入に向けての細かなところを検討していく必要。
- 段ボールの規格化の話を産地とするとしても、決定権を持っている者と話すことは大切であり、秋以降に産地、実需者を交えて議論をすることは非常に重要。
- 切り花と鉢物の方向付けは異なるので混在させずに二方向で提示していく必要。

2. パレット及び台車について

- 乾式の段ボールの輸送を 11 型パレットで輸送することについては、（今日参画しているメンバーにおいては）コンセンサスを得ていると思う。
- 当市場では台車で販売先に輸送し、代わりに販売先から前回分の台車を回収して循環させている。
- 産地から大ロットで単一品目を運ぶのはパレットに有効性があるが、小ロットで多様な品目がある場合は台車を活用することが有効。産地から市場にはパレットで運び、市場から実需者には台車を使うことがあるので、どちらか一方という話にせず場面によってパレットと台車を併用するべき。
- 商品を塊で移動させていくことが基本であり、その中でパレットと台車を使い分ければよい。
- 当市場では、パレットは場内移動用に使用しており、地方市場に転送する際にはトラック付近までフォークリフトを使って運び、その後は手積みを行っている。地方市場からの入荷の場合には、トラックからフォークリフトで下ろして、その後に台車に乗せ替えてパレットを回収している。パレットの回収に向けた管理はしっかりとやる必要がある。
- 場面場面でパレットと台車の使い分けのベターな方法を提示すればよい。
- レンタルパレットを導入するには誰がどのようなコスト負担をするのか検討する必要がある。

3. 外装について

- 11 型のパレットに合わせた乾式の段ボール 4 種類を試験して成果を確認しているものの、現状では産地によって箱の種類は様々であり浸透していない。他業界では中身に比べて箱が大きい場合は緩衝材を入れて箱のサイズを統一化している事例もあるので参考にできるのではないかな。
- 11 型のパレットに合わせた箱の設計は行ったが、その箱にどのように詰めていくのか、また、100 本箱から 50 本箱、20 本箱となってきたが、物流効率を考えると 100 本箱とし、市場で小分けにするべきであり、そのようなソフトの部分の検討が全くされていない。
- 卸売業者、仲卸業者が分荷する役割の中で、産地に 20 本箱を進めていくことがいいのか、全体の役割分担の中で検討する必要。
- 花きで流通している箱の種類はとて多く、標準化できるものは標準化し、標準化できないものは無理に標準化するのではなく別のものとして取り扱う必要がある。
- 米国に輸出している花きの事例を話すと、サイズの違うものを一つの箱に可能な限り詰めて積載効率を上げて出荷し、現地でそれをサイズ毎に小分けしており、出荷者と荷受けの役割分担ができているので、国内でも役割分担はとても重要なことだと思う。
- 標準化を決めるのはハードだけでは不足していて、それを運用だけでなく、管理・メンテナンスが必要であり、管理のことを考えると所有パレットに比べ、レンタルパレットの方がメリットも大きい。積み付けの仕方などソ

フト的なことも考える必要がある。

- 荷崩れ防止策も箱にノッチみたいなものをつける工夫や通気性のよい、ラップに代わる資材の開発などディテールの検討も必要。

4. JF コードについて

- JF コードは、即時発番性に乏しいといった課題があり、流通している商品コードに JF コードをひも付けし、さらに機能を付加しないと浸透していかない。

5. ソースマーキングについて

- 現在は FAX で送られてくる出荷情報も、EDI フォーマットにすれば正確性・迅速性につながると考えている。
- ソースマーキングの導入により、出荷から販売まで効率よく正確な物流になると考えている。問題はどこが作業を負担するか。
- 地方市場からオーダーが入ったら、当社で全てシール（ソースマーキング）を貼って、シール毎に台車に乗せて地方市場に朝送り込んでおり、当該市場ではセリ人 1 人、運搬を行うパート 3 人の少数で市場が運営できているので、シールの効果は大きいと感じている。

6. その他

- 湿式であることが必要な花きがあることは事実だが、水に漬けておけば鮮度が保たれるという感覚のみで湿式にしているものも見受けられる。大半のものは乾式でいいのではないかと考えており、特に長距離輸送は乾式に変えることで積載効率を上げて輸送コストを下げられるのではないか。
- パレットや EDI のハードの話は花き市場協会の方で進めているが、ソフトの話も進めていく必要がある。例えば、鮮度保持に効果的と現地で言われているオランダ産の前処理剤を使用している実態があるが、科学的な根拠が生産者側に示されていない。どのような条件下で使えばいいか等研究結果を基にした正確な情報を提供する必要があると考えている。
- これまで花き市場協会で行ってきた標準化に係る導入試験により規格化やソースマーキングは効果があると実証された。あとは普及に向けて継続するしかないと考えている。今後産地の集出荷場が集約されることが予想される中、課題に直面したときに産地は対応策についてゼロから考える必要はなく、必要になった時に試験結果を活用してもらえればと考えている。
- コロナ下で非接触の取引をしなければならない状況に追い込まれて、ネット取引を開始して、使ってみると便利だからネット取引を継続する者が多くなった事例を踏まえると、輸送コストが上昇しているこの機会に T11 パレットや段ボールの話を進められる可能性はあるのではないか。

(以上)